令和７年度総括評価表

R8.3.1

自己評価					学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価		学校関係者の意見	
人権教育の充実	【学校目標】 **生徒一人一人の人権を尊重した教育を徹底するとともに、自他を大切にする態度と確かな人権感覚・人権意識を育む。** ① 生徒がお互いの人権や個性を認め合えるような環境を整え、いじめの早期発見・早期対応に努める。 ② 人との適切な距離感を身に付けるとともに、情報社会に対応した情報モラルの育成を図り、人権意識の高い生徒の育成に努める。 ③ 生徒が自分の想いや不安などを大人に相談できる体制づくりに努め、満足度の高い学校生活が送れるように支援する。	評価指標 ① いじめ防止プログラムを実行し、オリエンテーションや「ゆるトーク」など年３回以上行う。 ② 「こころとからだの学習」や「スマホ安全教室」など、学びの機会を年に５回以上設定して知識のアップデートと意識の向上を図る。 ③ 個別生徒面談「ゆるトークウィーク」を年２回以上、いじめに関するアンケート調査を年３回実施する。 活動計画 ① 予防学習の充実に努める。「さん付け呼称」「丁寧な言葉遣い」に努める。通学オリエンテーションや人との関係性に関するオリエンテーションなど、年間通じて定期的に実施する。 ② 「こころとからだの学習」や講演会等を通して、人との適切な距離・個人情報の保護やSNSでの適切な関わり方を学ぶことで、他者の人権を尊重し、自らの人権を守る意識を育てる。 ③ 個別生徒面談「ゆるトーク」やformsを活用したアンケートの実施など、様々な方法を組み合わせて生徒の実情に応じた対応のあり方を進める。	評価指標の達成度 ① formsで年3回いじめに関するアンケートを行い、いじめの早期発見・早期対応に務めた。回答内容を精査し、教員が連携して状況に応じた対応を行った。 ② 本年度途中からスタートした制服の自由化を機として「自分らしさを表現する」大切さを考える機会を設け、ジェンダーレスの知識と意識の向上を図った。また、当初の予定通り「こころとからだの学習」「スマホ安全教室」も年5回以上実施できた。 ③ 環境変化により不安が拡大しやすい4月・9月に、担任による個別生徒面談期間を設けて話しやすい場面を設定したことで、日常生活では見えづらい小さな課題や問題点にも対応することができた。 活動計画の実施状況 ① 4月当初の各オリエンテーションや長期休業前後の生徒集会などを活用し、折に触れて「人との関わり方」について、生徒に語りかける機会を持った。 ② １年間通じて各学年で「こころとからだの学習」の時間を設け、段階的に学習を継続した。全学年対象に夏休みの登校日に講師を招き「スマホ安全教室」を実施して情報の利便性と危険性についての知識を深めた。 ③ 4月・9月に「ゆるトーク」期間を設け、身の回りの様子などを担任に話しやすい環境づくりに努めた。いじめ防止アンケートをformsで実施した。	総合評価 A （所見） 年度初めのオリエンテーションで望ましい態度の学習や本校が大切にしたいことの学習を行い、学校全体での共通理解を深めた。 人間関係の構築において、自他の権利を大切にしながら問題を解決していく成功体験の積み重ねは、生徒の自己肯定感を高める。日々の学びを継続する中で、自他を大切にする態度の育成・いじめなどの人権侵害を許さない人権感覚に磨きをかける生徒の成長につながった。 本校の支援体制は、生徒個人の要因よりも環境の設定に重きを置く観点からアプローチするという社会モデルに基づいて構築しており、担任をはじめ各担当や関係機関との連携による支援体制の充実を目標としている。	○「ゆるトーク」という取組は大変興味深い。生徒自身が「自分は大切な存在」と思えること、「大切にされている」と実感できることが大切だと感じる。日常の教育活動全体を通して、生徒が話しやすく相談しやすい環境作りを丁寧にしていることが伝わってくる。学校の仕組みとして、実践されていることは素晴らしい。 ○ジェンダーレス制服の取組では、「こうあるべき」という価値観の押しつけにならないように注意してもらいたい。多様な考えの人がいることを前提にした教育活動を希望する。	○「さんづけ呼称」「挨拶の徹底」「丁寧な言葉遣い」など、本校の取組の意義を全教職員で再確認し、どの教員も継続して指導できるようにする。 ○温暖化の加速やＳＮＳの拡大、ジェンダーレス化の推進など、自然的・社会的環境の変化が著しい現代社会に対応すべく、従来の校則などの体制を柔軟的に変更できるようにする。 ○生活環境が変化した時にこそ、古い価値観や不安からいじめが起こりやすいため、啓発や相談体制を充実し、いじめが起きにくい環境を整える。講演会等の選定については年度内の回数が増えすぎないように精査して設定する。 ○生徒が想いや不安などを安心して大人に相談し、満足度の高い学校生活が送れるよう教職員の研修の継続・校内の支援体制の充実を図りたい。

自己評価					学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価		学校関係者の意見	
キャリア教育の充実	【学校目標】 **生徒個々の資質や適性に応じ、職業能力や意欲等を高める指導を系統的・組織的に実施し、社会的・職業的自立に結びつける指導を推進する。** ① 社会で求められる実践的なスキルの育成に向けて、外部機関の検定受検に向けた授業を実践する。 ② 進路パスポート（「就労パスポート（厚生労働省）」を基に本校用に作成しているもの）を活用し、生徒一人一人の適性や能力に応じた就業体験を実施するとともに、生徒・保護者、関係機関等と共通理解を図り、最適な進路選択ができるように取り組む。 ③ 保護者が就業についての知識や理解を深め、卒業後の生活に関する研修の場を提供する。	評価指標 ① 豊富な経験と実績を持つ外部講師を招き、専門的な知識の講義と実技指導を組み合わせた講習会を年間３回以上行う。 ② 就業体験２回以上。進路説明会１回（各学年の保護者対象）。拡大進路相談（２年生と保護者対象）を個別に実施。進路便りを年間12回発行する。進路パスポートを年間２回以上の更新を行う ③ 保護者対象の事業所見学や研修を年２回以上行う。 活動計画 ① 検定の出題傾向、評価基準、求められる実践的技能を分析し、授業目標と内容を明確にする。講習会では検定の重要ポイントに焦点を当て、実践的技能を習得できるような演習を取り入れる。 ② 関係機関等と情報交換を行いながら状況を把握し、進路指導課が中心となって、ＨＲ担任や保護者、事業所等と綿密に連携して就業体験を計画・実施する。進路パスポートを用いて実習等を振り返りながら得意不得意等を整理し、自己理解を促進し、本人保護者と共有しながら自分に合った進路選択と進路決定が出来るようにする。 ③ 保護者アンケートを参考にし、事業所見学を計画、実施する。研修として、卒業後に手続きが必要となる「障害基礎年金」について設定する。	評価指標の達成度 ① 年間４回外部講師を招聘し、ビルクリーニング技能士3級受検に向けた講義と実技指導を実施した。今年度は2名が受検した。 ② 就業体験２回以上、進路説明会１回、拡大進路相談、進路便り発行１２回、進路パスポート更新２回以上、いずれも実施できた。 ③ 夏期休業中に行った事業所見学では、本校の卒業生の働く姿を見学でき、入社からの成長の話を聞くことができた。12月13日に「障害基礎年金」の研修を行った。講師から具体的な資料をいただき、実際に記入する時間を持つことができて大変参考になった。 活動計画の実施状況 ① 9月以降外部講師を招聘し、実技技能の指導を中心に外部機関の検定受検に向けた授業を３回実施した。 ② 校内実習・現場実習を生徒の実態に合わせて実施できた。その中で、個別の課題も出てきたので、連携を取りながら対応した。 進路パスポートデーを行い、全学年振り返りを行い整理することができた。 ③ アンケートを基に、事業所見学を7月23日、25日、8月21日の3回実施し、のべ11名の参加があった。「障害基礎年金」の研修は12月13日に実施し、11名の参加があった。	総合評価 A （所見） 職業能力や意欲等を高めるために、生徒への指導に繋がる教員や保護者への研修にも力を入れることができた。 継続した学習を積み重ねることにより、就業体験（校内実習・現場実習）を実施することができた。現場実習参加が難しかった生徒に関しては、見学等を行い、個に応じた社会的職業的自立を提案することができた。 進路パスポートは自己理解できていることのみの記入なので、課題等は担任が手書きで追記し、実習先に本人の実態をできるだけ知ってもらえるように取り組んでいる。それをもとに実習の様子を見てもらい、振り返りで、課題や得意不得意が理解できるように取り組んだ。学校全体の取組として更に工夫できるところはあるが、本人・保護者・学校の情報共有や事業所への啓発として役立っている。	○現場実習に参加できない生徒、登校の難しい生徒等について、行政・福祉の立場からも、様々な関係機関が関わっていくことは重要だと考える。目標を高く掲げて、より豊かな生活になるよう継続して取り組んでもらいたい。	○社会的・職業的自立に結びつける指導のためには、来年度も引き続き、様々な取組を行っていく必要がある。支援学校での技能検定以外に、一般の社会でも認知されている外部機関の検定受検に向けての取組は今後も進めていく。 ○現場実習に参加できない生徒、登校の難しい生徒等については、早い段階から関係機関にも関わってもらい課題解決に取り組む。進路パスポートに関して自己理解が進み、記入内容が充実し、特徴の見える化を更に進める方策を考えて取り組む。これらの取組は生徒個々の資質や適正に対応するために大切なプロセスだと考える。 ○保護者への取組としては、事業所見学を引き続き行い、来年度も進路指導課と見学先について保護者のニーズを反映させる。「障害基礎年金」については、卒業後に手続きする重要事項であることの周知に努める。学年の進路研修会に行う等、参加しやすい機会を設け、本校の大きな目的である発達障がいのある生徒の社会的・職業的自立に結びつける指導を続けていく。

自己評価					学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価		学校関係者の意見	
個別の指導・ 支援の推進	【学校目標】 **生徒・保護者の教育的ニーズに応じた「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」を作成し実践することで、きめ細かい指導・支援を推進する。** ① 「個別の教育支援計画」をもとに、「個別の指導計画」の目標を考えて適切に実践できるようにする。 ② 「個別の教育支援計画」を作成し、生徒・保護者・教員が個々の教育的ニーズを共有することで、生徒の実態に合った「個別の指導計画」の作成につなげる。	評価指標 ① 話し合いに基づき、事例検討や実践に役立つ研修を２回以上設定し、事後アンケートでこれからの授業や目標設定に役立ったと回答した教員が80%以上となる。 ② 生徒・保護者の個別面談を各２回以上を実施し、課題や目標を共有する。 活動計画 ① 生徒の正確な実態把握のために必要な力について整理し、効果的な研修内容について課内で話し合いを持つ。 ② 「個別の教育支援計画」（様式５－２）支援計画表を基に、生徒の現状や希望する支援等を話し合い、生徒・保護者・教員が目標を共有し、適切な指導方法や必要な支援を具体化する。	評価指標の達成度 ① 事例検討や実践に役立つ研修を6回設定し、事後アンケートで役立った、概ね役立ったと回答した教員が100%だった。 ② 生徒・保護者とも２回以上の個別面談実施率が100%であった。 活動計画の実施状況 ① 課内での話し合いを元に、前期にみなと学びの三つの柱を確認し、目標設定がしやすい研修を計画、実施した。 ② ４月の面談で個別目標、夏季休業中の家庭訪問・保護者面談でその成果や課題を共有し、学年末の面談で次年度の課題等について話し合った。	総合評価 A （所見） 「個別の教育支援計画」をもとに、「個別の指導計画」の目標を建て、実践するために、事例検討や教員研修が有効であった。保護者面談を２回以上を行うことにより家庭のニーズも拾うことができ、卒業後の生活を見据えた目標を設定できるなど効果があった。	○「目指す生徒像」があり、それを実現するための「学校目標」があるが、「個別の指導計画」の立案には、個々に応じて、指導の方法や支援の手立てを考えていく必要がある。活動計画にあるように教員の研修を継続してその精度を上げていくという視点と「個別の指導計画」と「個別の教育支援計画」全体が教育活動の中で有効に機能しているかを確認するという視点がある。そのことを意識して今後も取り組んでもらいたい。	○「個別の指導計画」の目標を事例検討に出して実践することで、研修と実践を兼ね、実務量が増えないように取り組む。 ○生徒・保護者のニーズに基づいた「個別の指導計画」を作成し、その指導を組織的に行うためには、各教科の免許保有教員の確保と専門性を生かした適切な配置が必要になる。複雑な教育課程の実効性を高めるため、教員の研修も継続的に行う。
専門性の向上と連携・ 協働	【学校目標】 **専門性の向上に努め、発達障がいに関わる積極的な助言・支援を行うとともに、保護者・地域・関係機関等と密接に連携・協働する。** ① 信頼される学校づくりのため、積極的な情報発信を推進する。 ② 県内の高等学校の教員を対象に、発達障がいのある生徒へのより専門的で効果的な支援を提供できるように、相談支援や自立活動に関する実践的な知識習得を目的とした研修支援を行う。 ③ 校内研修を活用しながら教員の専門性の向上を図る。	評価指標 ① 学校行事、各学科の活動等のホームページ更新を各学期で100回以上行う。 ② 高等学校における支援の専門性と組織的な対応力の向上を目指し、「学校全体で取り組むポジティブ行動支援（SWPBS）」の研修を実施する。研修後にアンケートを実施し８割以上から「今後の支援に役立てたい」という肯定的な回答を得る。 ③ 年６回「みなトーク」を実施する。アンケートを取り、ニーズの高い研修を把握する。 活動計画 ① 各課や教科担当等が、積極的にホームページを通じて情報発信できるように、機器の使い方や発信方法等について積極的に共有していく。 ② 発達障がいのある生徒へのより効果的な支援を目指し、通級実施校や学習支援員配置校等と定期的な情報交換を行い、各校の支援事例や課題を共有する。実践記録や授業参観を通して多角的に検討し個別の支援計画の質の向上を目指す。 ③ 「みなとーく」を活用し、本校での教育的なニーズも組み込みながら研修内容を決定し、実施する。	評価指標の達成度 ① 学校行事に加え、各学科での行事、授業を含め各学期で２００回以上の更新を行うことができた。 ② 12月に発達障がい教育研修会で高等学校での支援の充実と学校規模ポジティブ行動支援についての講演を開催した。77%から肯定的な回答を得た。 ③ みなトークを6回実施し、ニーズの把握を行った。 活動計画の実施状況 ① ICT支援員を活用し、情報課員を中心にホームページ更新のシステムについて定期的に確認、研修を実施し、教職員への情報共有を適宜行った。 ② 通級実施校４校での定期的な情報交換と支援体制づくりの構築を実施した。県立学校、中学校等３校で特別支援教育研修を実施した。 ③ 「みなトーク」は、新しい情報も取り入れながら全6回の研修を計画し、実施できた。	総合評価 B （所見） 発達障がいに関わる積極的な助言・支援のために外部に向けた情報発信には意識して取り組んできた。学校のホームページの閲覧回数は1日１０００回を超えることもある。更に他校の先生が活用できる情報発信が可能である。発達障がい教育研究会でのアンケートを基に更に検討を行いたい。発達障がいに特化した学校として社会的役割は大きく、校内研修を始めとした研修の機会の確保には課題が大きい。	○目標に対する評価を行う際、達成できなかった理由が記載されていると良い。発達障がい教育研修会のアンケート結果で77%が肯定的だったということだが、残りの23%の意見の中に改善のヒントがあると思う。次年度への課題や今後の改善方策を考えるときに役立つし、学校運営協議会委員も評価の根拠が示されていると意見を言いやすい。	○来年度は夏季休業中に第１回の発達障がい教育研究会を行う予定である。夏季休業中に開催することで、高等学校や支援学校等の教職員が参加しやすくなると考えている。様々な立場の教職員に興味を持ってもらえるような研修内容を取り上げ、アンケートで把握したニーズを参考に来年度の研修内容を考えていく。 ○ホームページやSNSを活用することにより、発達障がいのある生徒の指導・支援に有効なツールや指導方法の啓発を行っていく。

自己評価					学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価		学校関係者の意見	
集団・交流活動の推進	**望ましい集団活動を通して心豊かな人間の育成を図るとともに、交流活動を推進して地域や人とのつながりを大切にする態度を養う。** ① 保護者との連携協力を推進する。保護者同士の交流を含めた活動を実施する。 ② 感染症や熱中症対策等安全面に充分に注意を払い、学校行事を実施する。 ③ 作業や交流活動を通して、奉仕の精神を養う。	評価指標 ① PTA通信を年間２回発行し、事業所見学、保護者と子どもの活動を年間１回ずつ実施する。 ② 「みな☆まつり」（文化祭）を公開範囲（保護者・卒業生・旧職員）を広げて実施する。「みな☆スポーツ(球技大会）」の実施種目を実態に合わせて変更する。 ③ 新たな授業や部活動の交流も加え、こども園・近隣施設・事業所・公的機関訪問、地域との交流を行うとともに年間５０回以上行う。 活動計画 ① PTA活動として、PTA通信の発行、学校祭でのバザー（リサイクル制服）、弁当販売の手伝い、事業所見学、保護者と子どもの活動を計画、実施する。 ② 感染症・熱中症対策をとりながら実施するとともに「みな☆まつり」「みな☆スポーツ」を生徒の実態を充分に把握し、内容を精選する。 ③ 準備や活動の様子をホームページで紹介する。	評価指標の達成度 ① PTA通信は前期、後期に発行した。文化祭でバザー、弁当販売の手伝いを実施。保護者と子どもの活動は、夏期休業中にヨガを実施した。 ② 文化祭の公開範囲を保護者・卒業生・旧職員に広げて開催した。(9/27) 球技大会では風船バレー・バドミントンの２種目をクラス対抗で実施した。(12/19) ③ こども園・近隣施設・事業所・公的機関訪問、地域との交流を年間６０回以上実施することができた。 活動計画の実施状況 ① PTA通信は５月と３月に発行した。学校祭でのバザー（リサイクル制服）、弁当販売の手伝い、事業所見学、保護者と子どもの活動を実施した。 ② 学校教育活動等の実施に当たっては注意が必要となるため、チェックリストを活用し、熱中症予防に努めている。 ③ 活動ごとにホームページで様子を紹介している。	総合評価 A （所見） 望ましい集団活動を通して、心豊かな人間の育成を図るために、文化祭・球技大会・交流活動を推進してきた。授業や部活動で地域や人とのつながりを大切にして実践ができた。教職員も参加する保護者と子どもの活動もアンケートを取り、毎回内容を変えて実施できた。	○文化祭では、PTA活動として、バザーや弁当販売をしたということだが、ひのみね医療療育センターを始め、地域にも声をかけてもらえると繋がりになると思うので、ぜひ来年度に向けて検討してほしい。	○文化祭でのバザー、弁当販売の活動は、学年を越えて交流できる機会なので来年度も継続する。保護者と子どもの活動は、アンケートを実施し、日程や内容について検討し、参加に興味が持てるものを企画する。 ○行事を精選し、教育的効果の高い活動や系統的な活動に限定するなどの工夫が必要であるが、地域や人とのつながりができる活動については、方法を工夫して継続していき、地域にも広報して繋がりを強めていく。

自己評価					学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画	評価		学校関係者の意見	
ｳｪﾙﾋﾞｰｲﾝｸﾞの向上	【学校目標】 **一人一人のウェルビーイングを高め、信頼される学校、楽しい学校づくりを推進する。** ① 専門教科における様々な作品に対する創造力の向上を目指し、各自の意見を反映することができる活動を実践する。 ② 安全で安心できる学校づくりに務める。 ③ 多様な学びを推進する。 ④ 校務の精選・効率化・適正化を図る。 ⑤ 学校運営協議会・ゾーンとの会議を充実させる。	評価指標 ① 各学年において、一般公募の企画に１つ以上応募する。教育版マインクラフトの取組において、他学年と連携し、テーマに沿った作品を完成させる ② 地震・津波・火災想定避難訓練を年間６回以上、救命講習、不審者対応訓練を年１回実施する。 ③ 「ラーケーション」取得率100%とする。「みな図書ルーム」を常時開室とする。 ④ 会議の削減・時間短縮をする。45分校時の日を60%以上とする。 ⑤ 学校運営協議会を３日開催する。ゾーン連携会議に毎月参加する。 活動計画 ① 生徒の興味関心を引き出すテーマを選ぶようにする。多様な自己表現ができるように、アナログだけでなくiPadや液晶タブレットなど様々なICT機器を使用する。 ② 年間４回、毎回異なった想定の地震・津波想定避難訓練を行う。内１回は全校生徒・教職員で「みな☆ぼうけん」（１日防災研修）とする。近隣施設（乳児院・ハナミズキ）との合同火災想定避難訓練２回を実施する。緊急時の救命講習と不審者対応訓練は講師を招いて、より実践的な研修を実施する。 ③ 「ラーケーションの日」年間３日とは別に「みなとラーケーションデー」を年３回設定して、休日の過ごし方学び方を助言支援する。「みな図書」の取組を充実させ、豊かな心・社会性・自ら学ぶ力等を向上させる。 ④ 会議の連絡事項はTeamsを活用するなどペーパーレス化を進める。教育課程を工夫し、生徒・教員の時間的・精神的な余裕を確保する。 ⑤ 学校運営協議会・ゾーン連携会議等をとおして、地域との信頼関係を強める。	評価指標の達成度 ① 今年度は、一般公募ではないがアビリンピックのためのポスターやチラシ制作の依頼を受け、３学年で分業して作品案を仕上げた。教育版マインクラフトは、四国ブロック大会に出場し、奨励賞を得た。 ② 地震・津波・火災想定避難訓練、救命講習を計画通り実施した。 ③ ラーケーション取得率を達成することができた。余暇活動だけでなく、自立に向けた通院練習や調理など生徒それぞれに考え取り組むことができた。みな図書ルームやスペースは生徒も楽しみに活用していた。 ④ 年度初めに45分校時へ移行した。会議は書類回覧も活用して時間短縮した。 ⑤ 達成できた。 活動計画の実施状況 ① マインクラフトへの応募を行った。情報デザイン科３学年の生徒を中心に、グループを編成して作品制作に取り組んだ。 ② 地震津波・火災想定避難訓練を4回実施した。救命講習も実施した。 ③ 多様な学びを支える「みなとラーケーションデー」についての周知を行い、全クラスで取り組んだ。みな図書ルーム、新聞コーナー、廊下のみな図書スペースが活用された。 ④ 学校運営戦略会議などの連絡事項は、Teamsで共有するなど、ペーパーレス化が進んでおり、情報の共有だけでなく、確認や報告など使用は多岐に渡っている。今年は、４５分校時を基本としており、前後を準備と振り返りに充てるなど生徒・教職員の時間的・精神的余裕の確保に役立っている。 ⑤ 学校運営協議会・ゾーン連携会議等で出された意見や情報を元に、防災についての取組を進めている。	総合評価 A （所見） 発達障がいの生徒が自己表現できる場として、アートや情報デザインは大変効果的である。教育活動が偏ることなくそれぞれが表現できる場を確保できた。 また、安全安心な学校作りのために各種訓練も実施し、生徒・教職員ともに有事に備える知識の獲得と実践練習ができた。ゾーン合同防災会議を開催し、情報共有を行うとともに今後の対策についても進めることができた。 多様な学びを推進するための「ラーケーション」の取組について、生徒・保護者・教職員からアンケートを取った。「良かった」「どちらかというと良かった」の割合が約８５%であった。社会の変化に伴い、卒業後の力として求められている「自分の心身の状態を知り、早めに整える力」「余暇の使い方を主体的に考える力」などの育成に寄与することができた。	○徳島県の取組として、ラーケーションが始まったと思うが、目的やねらいを明確にすることで、より有意義な取組になる。資格習得に向けた検定を受けに行くだとか就労に向けた学習など生徒それぞれが目的を持てるような教員の助言も有効だと思う。 ○多様な学びの推進としての評価指標を「ラーケーション取得率100%」と設定していたが、取得した生徒の満足度など別の評価軸の方が望ましい。	○継続して取り組んできたMinecraftカップへの出場は、授業時間の確保が難しいので、次年度は、現在の教育活動の中でできることを丁寧に取り組んでいくことで、表現活動としての時間を確保していく。 ○安心安全な学校作りのために、防災への取組は今後も必須であり、ゾーンとの連携を図るだけなく、地域住民に向けた働きかけを行っていく。 ○多様な学びを推進するための「ラーケーション」の取組の教育効果を更に上げるため、「目指す生徒像」を共通理解し、学習の中で生徒に丁寧に助言していく。教職員自身もロールモデルとして多様な学びを体現していく。 ○校務の精選・効率化・適正化を図るためには、校務DXは欠かせない。パソコン作業が苦手な教職員も含めて、スキルアップできるようなオリエンテーションや研修を実施していく。